

平成三十年（二〇一八）三月二十六日発行  
『大倉山論集』 第六十四輯 抜刷  
（公益財団法人 大倉精神文化研究所）

（第三十六回研究所資料展）

## 変貌する地域、港北の地図展

平井誠二・星原大輔

(第三十六回研究所資料展)

## 変貌する地域、港北の地図展

平井誠二・星原大輔

公益財団法人大倉精神文化研究所が立地している神奈川県横浜市港北区大倉山地域は、かつては神奈川県橘樹郡大網村太尾と呼ばれていた。大倉山地域は、昭和二年（一九二七）四月一日に横浜市に編入されるが、当研究所の創立者大倉邦彦はその翌年（一九二八）に敷地を購入し、研究所本館の建設を開始した。

当研究所では、その頃から現在に至る数多くの資料を所蔵しており、沿革史資料、地域資料として来館者に公開している。平成二十九年（二〇一七）は、大倉山地域が横浜市に編入されてから九〇周年の節目の年となった。この間に、地域は都市近郊農村から市街地へと急激に変貌していった。

そこで今回、当法人が所蔵する様々な地図類を通して、大倉山地域や港北区域の変貌をたどる資料展を開催した。期間は平成二十九年十一月一日から翌年二月二十八日までを予定していたが、好評につき四月十四日まで会期を延長した。本稿は、その展示報告である。

以下、資料展で展示した解説パネル・資料キャプションを順次紹介していく。なお、本稿を作成するにあたって、展示した解説パネル・キャプションの一部を加筆修正した。

### ごあいさつ

明治十四年（一八八一）、陸軍参謀本部は横浜市港北区域の詳細な測量を行い、迅速測図を作成しました。こうして、初めて港北区域の正確な地図が作られました。それから、一三六年間、今年平成二十九年（二〇一七）六月に改訂された港北区洪水ハザードマップまで様々な地図が作られてきました。

公益財団法人大倉精神文化研究所では、この間に作られた港北区や横浜地域の地図、東急東横線の沿線案内などから、近年刊行されたウォーキングマップやイラストマップ、防災マップまで、数多くの地図を所蔵しています。それらの地図からは、急速に変貌してきた地域の歴史や特色などを見て取ることが出来ます。

当財団が立地する大倉山地域は、かつては神奈川県橘樹郡大綱村太尾と呼ばれていました。昭和二年（一九二七）四月一日に横浜市に編入されて、今年で九〇周年を迎えます。そこで今回、所蔵の地図類から港北区域の変貌をたどる資料展を企画いたしました。明治から現代まで、地図にはその時々の詳細な地域情報、歴史が記録されています。様々な地図から、昔懐かしい風景や、知らなかった風景を思い浮かべて下さい。そして、港北の未来を想像してみてください。

### 防災マップ

#### ・港北区洪水ハザードマップ

（平成二十九年（二〇一七）六月発行）

大倉精神文化研究所蔵

皆さん！ ご存じですか！

平成二十九年（二〇一七）六月、港北区洪水ハザードマップが新しくなりました。これまでより、被害予想が厳しくなっています。ご自宅や通学、通勤場所、よく行く所を確認してみてください。

二枚のパネルは、ハザードマップの裏面（表面の縮少図と解説文）を二つに切ったものです。表面は全面が地図になっています。新しいマップは、港北区役所で無料配布されています。

### 港北区域の変遷

現在の港北区域は、かつては都筑郡と橘樹郡に属していましたが、昭和二年（一九二七）、昭和十四年（一九三九）、昭和四十四年（一九六九）、平成六年（一九九四）の四回にわたる変遷により、現在の区域が確定しました。

### ・大横浜市交通地図

変貌する地域、港北の地図展（平井・星原）

（昭和四年〔一九二九〕八月発行〔復刻〕）

大倉精神文化研究所蔵

昭和二年（一九二七）四月一日、横浜の市域が拡張され、神奈川区が誕生しました。その時、都筑郡と橘樹郡から、南・北綱島村と、鶴見川以南の村々が横浜市に編入され神奈川区の一部となりました。この地図はその二年後に発行されたものの複製です。

### ・港北区全図

（昭和二十八年〔一九五三〕一月発行カ）

沿革史資料No.2635

昭和十四年（一九三九）四月一日、港北区が誕生しました。区域は、現在の緑区、青葉区、都筑区を含み、地域の約三分の一を占めていました。

この地図は、昭和二十八年正月に朝日新聞販売店が配ったものと思われます。大倉精神文化研究所の名が「大倉山文化科学研究所」と表記されているのは、昭和二十～三十四年の間改称していたからです。

## ・港北区全図

(昭和五十七年〔一九八二〕四月発行)

大倉精神文化研究所蔵

昭和四十四年(一九六九)十月一日、港北区の西側半分が分区され、緑区が誕生しました。

この地図は、昭和五十七年(一九八二)のもので、すでに新幹線が開通していますが、まだサンヴァリエ日吉は日吉団地、コンフォール南日吉は南日吉団地と記されています。

## ・港北区民生活マップ

(平成九年〔一九九七〕三月発行)

大倉精神文化研究所蔵

平成六年(一九九四)十一月六日、港北区と緑区の行政区再編成により、青葉区と都筑区が誕生し、現在の区域が確定しました。

この地図は、平成九年発行で、港北区役所の情報紙『楽・遊・学』に「わがまち港北」を連載するために使

用していたものです。大倉山一〜七丁目はまだ太尾町ですし、日産スタジアムも新横浜公園も整備中です。

## 研究所建設前の大倉山地域

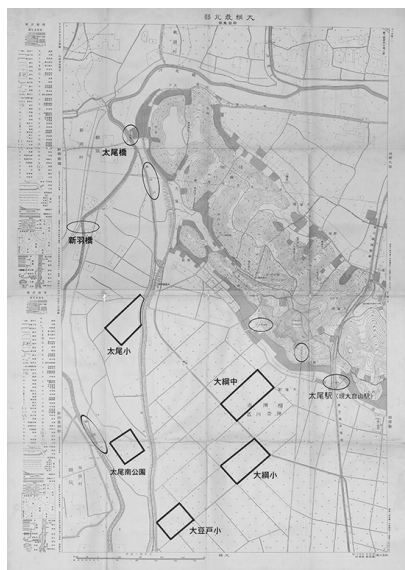
大正十五年(一九二六)十一月に内務省復興局は大倉山地域の測図をしました。この辺りは、田畑が広がる田園地帯でした。その九ヶ月前に東京横浜電鉄神奈川線(現東横線)が開通し、宅地開発が計画されていました。昭和三年(一九二八)大倉邦彦が大倉山の土地を購入し、研究所の建設に着手したことで、周辺地域は大きく変貌していきます。

## ・大綱最北部

(大正十五年〔一九二六〕)

沿革史資料 No.5607

内務省復興局は、関東大震災後の都市計画のために、東京と横浜の三〇〇分の一の地形図を作りました。この地図は、その内から大倉山地域周辺の地図二枚を張り合



【図1】

わせたものです。

大倉精神文化研究所と太尾公園の場所や太尾駅（現大倉山駅）から研究所までのルートなどが赤ペンで書き込まれています。

その地図に、現在の学校等を書き加えてみました（【図1】）。元は田だったことが分かります。道路の位置はほとんど変わっていません。

# 大倉山に残る古代人の足あと

鶴見川流域一帯には弥生時代の遺跡が多く残っています。実は、大倉山記念館の建物の下にも「太尾遺跡」（大倉精神文化研究所内遺跡）と命名された遺跡があります。ここから発掘された弥生式土器を含む出土資料は、南関東地方を代表する考古学資料の一つとされています。

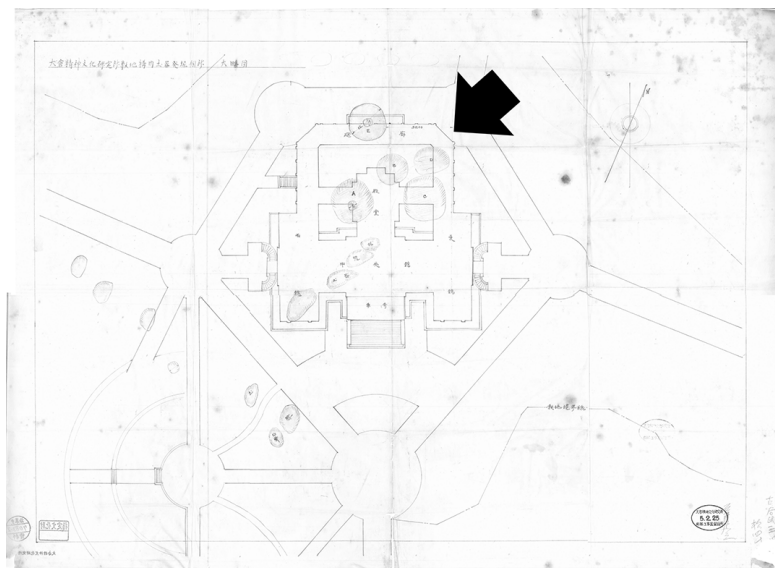
## ・大倉精神文化研究所敷地構内土器発掘箇所大略図

（昭和五年〔一九三〇〕二月二十五日作成）

沿革史資料No.70832（複製）

大倉邦彦から調査依頼を受けた考古学者の古谷清が、建築現場の人たちに作成してもらった図面です（次頁【図2】）。右下に大倉精神文化研究所新築工事監督詰所の印が押され、すぐ脇に建築現場の責任者であった石井延三の名前が鉛筆で記されています。

青で囲まれている箇所のうち、土器や石斧類が発掘された場所には青字で出土品名が記されており、中央に赤丸がある場所は住居跡です。なお、本資料は横浜市指定



【図2】

有形文化財に指定されています。

・写真「大倉精神文化研究所北面鋤取工事現況」

（昭和四年（一九二九）撮影）

沿革史資料No.6865-2（複製）

基礎工事が始まった直後で、【図2】の矢印の方向から、鋤取りを行なっている様子です。昭和四年（一九二九）十二月、工事現場の地中から土器や石斧類が発見されました。

・写真「参考品陳列台」

（昭和五年（一九三〇）頃撮影）

沿革史資料No.6878（複製）

出土した土器類を来所者に見てもらえるよう、特注で作成された陳列台です。三階応接室（現第五集会室）に置かれていました。土器類は現在、横浜市歴史博物館に寄託しています。

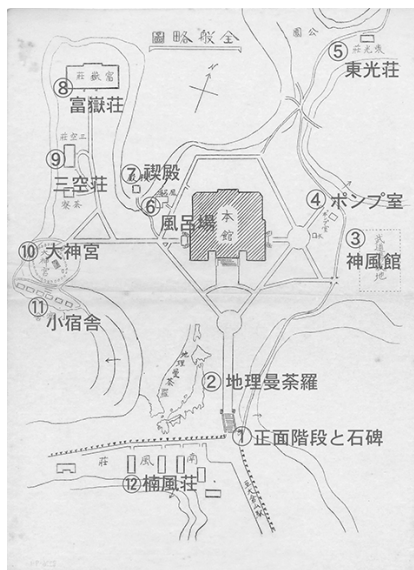
# 大倉精神文化研究所イラストマップ

・写真「全般略図」

(昭和十年(一九三五)頃作成)

沿革史資料No.8230-7(複製)

研究所本館(現横浜市大倉山記念館)の周辺には、研究員用の住宅や訪問者用の宿泊所、武道場など、様々な附属施設が存在していました。



【図3】

全般略図(【図3】)は、昭和十年前後に作成されたイラストマップです。「武道場敷地」と記されている場所に、昭和十一年四月、神風館が完成します。

・写真「正面階段と石碑」(図3①)

沿革史資料No.6876-30(複製)

沿革史資料No.6876-33(複製)

・写真「神風館」(図3③)

沿革史資料No.6876-59(複製)

・写真「東光荘」(図3⑤)

沿革史資料No.6876-66(複製)

・写真「禊殿」(図3⑦)

沿革史資料No.6876-43(複製)

・写真「富嶽荘」(図3⑧)

沿革史資料No.6876-62(複製)

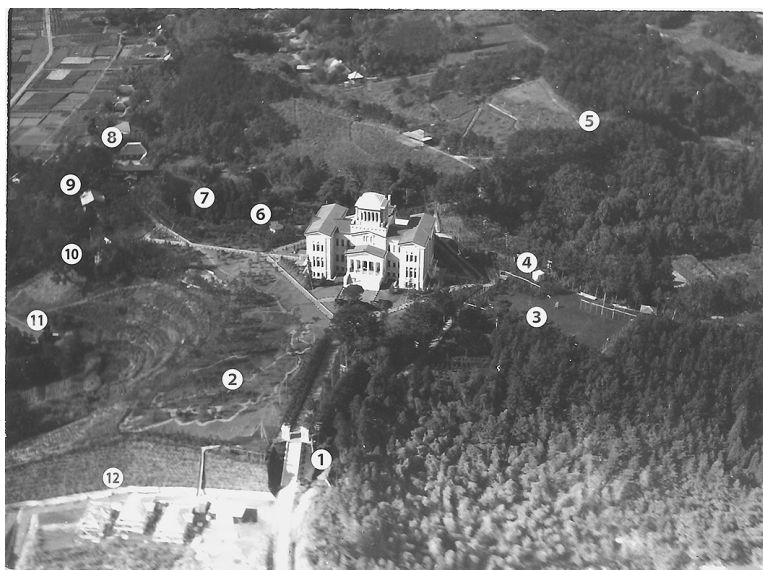
・写真「大神宮」(図3⑩)

沿革史資料No.6876-44(複製)

・写真「楠風荘」(図3⑫)

沿革史資料No.6878(複製)





【図4】

・写真「航空写真」

(昭和十年「一九三五」頃撮影)

沿革史料No.6876-70(複製)

この写真(図4)にも神風館が写っていませんので、昭和十年以前に撮影されたと推定されます。

大倉山地域の変貌

丘の上に建つ大倉精神文化研究所は、地域のランドマークになりました。昭和五十六年(一九八一)建物が横浜市に寄贈され、昭和五十九年に市民利用施設「横浜市大倉山記念館」としてオープンします。地域の人たちは、建物デザインから地中海をイメージして、記念館坂、記念館、オリーブ坂、商店街を回遊する街づくりを目指しました。

・リーフレット「大倉山エルム通り」

(昭和六十三年「一九八八」発行)

大倉精神文化研究所蔵

・「大倉山エルム通り」『案内MAP』

(平成十六年「二〇〇四」発行)

大倉精神文化研究所蔵

上の地図は昭和六十三年(一九八八)エルム通りがオープンした時、下の地図は平成十六年(二〇〇四)です。現在の店と比べてみてください。

迅速測図と現代の地図

迅速測図が作られてから一三〇年以上が経過し、その間に港北区域は大きく変貌しました。そのため、現状との比較が困難になっています。しかし、インターネットの地理院地図、歴史的農業環境閲覧システム、関東平野迅速測図／農業土地利用変遷マップ、などのサイトでは、迅速測図を現在の地図に重ねて表示させることが出来ます。

・第一軍管区地方二万分一迅速測図原図

(明治十四年「二八八一」測量《復刻》)

変貌する地域、港北の地図展(平井・星原)

大倉精神文化研究所作成

港北区域の正確な地図が作られたのは、参謀本部陸軍測量部が明治十四年(一八八一)に測図した迅速測図に始まります。迅速測図はドイツ式とフランス式の二種類の地図が作られました。今回は、フランス式彩色地図をつないだものを展示します。

・横浜市港北区のお城と館

大倉精神文化研究所作成

続日本一〇〇名城に選ばれた小机城を筆頭として、港北区域には、中世のお城や館が沢山ありました。それらは、敵の侵攻をいち早く察知して守りを固めるために、いづれも見晴らしのよい丘の上にあり、鶴見川や支流の鳥山川、早渕川、矢上川などから対岸一帯までよく見渡せました。

次頁の地図(図5)は、明治十四年測量の迅速測図を加工して、お城や館の推定位置を書き加えたものです。



【図5】

## 港北区の地名と鶴見川

### ・港北区内の鶴見川舟運歴史マップ

(平成二十五年「二〇一三」三月)

大倉精神文化研究所蔵

かつて、河川は道路と並んで重要な交通網の一つでした。河川交通のことを舟運とか水運と言います。内陸部に位置する港北区域には、鶴見川の舟運で物資が運ばれていました。鶴見川と道路が交差する場所には河岸と呼ば

ばれる船着き場が造られ賑わいましたが、現在は僅かな痕跡しか残っていません。

この地図は、鶴見川舟運復活プロジェクトがそうした舟運に係わる河岸や遺跡を調査して作った労作です。数字の箇所については、別紙に詳しい解説が付いています。

### ・港北区歴史地名ガイドマップ

(平成十八年「二〇〇六」二月)

大倉精神文化研究所蔵

昔の地名を調べると、鶴見川沿いの平地には、中土腐、池土腐、大沼、蛇袋、川端、下土腐、中久保(中窪)、具々田、裏土腐、堤外耕地、沼橋耕地、葭場耕地、窪新田、袋河岸など、かつて低湿地だったことを窺わせる地名がたくさん残されています。

この地図は、港北地名を調べる会が「最新神奈川県土地明細図集」(一九六三年)の字一覧表から区内一八五の地名を拾い、現代の地図に落とし込んだものです。裏面には、各字の由来が説明されています。

## 港北区の地形と鶴見川

港北区域は、中央を西から東へ流れる鶴見川と、かつて河川敷だった平地、その外側を囲む丘陵部から成り立っています。鶴見川の改修によって、平地部の開発が進んできました。

### ・鶴見川平面図

(昭和四十一年(一九六六)二月)

大倉精神文化研究所蔵

建設省関東地方建設局京浜工事事務所が作成した改修工事の地図です。作成された背景には、昭和三十九年(一九六四)の河川法の改正があります。これによって、河川管理者は工事実施基本計画を定めておかねばならなくなり、鶴見川の基本計画は昭和四十一年三月に策定されます。したがって、同年二月に作成されたこの地図は、策定作業で使用された資料の一つであったと考えられます。

昭和十四年(一九三九)から始まった国による鶴見川

の改修工事は、昭和三十三年の狩野川台風による大水害を機に見直しが検討されており、基本計画では、地図の緑色の個所のように、流れを変える河川改修、堤防の新築・強化などの実施が決定しています。しかし、地図が作成された年の六月、台風四号による大規模な水害が発生したため、地図にある基本計画には、治水安全度の向上を目的に、若干の修正が施されました。

この基本計画は昭和四十三年に大臣決定となり、改修工事が実施された結果、鶴見川流域の水害危険度は大きく下がりました。

ところで、緑色で示されている改修範囲は、鶴見川の一級河川の区間と一致します。河川法の改正によって、国民生活上特に重要な河川は、水系ごとに「一級河川」に指定され、国によって総合的に管理されることとなります。鶴見川は昭和四十二年五月に指定されますが、地図作成時には指定区間はほぼ固まっていたようです。

・狩野川台風（昭和三十三年九月）浸水図

大倉精神文化研究所蔵

かつての港北区域は、鶴見川が氾濫すると平地部が水没していました。

たとえば、この地図は昭和三十三年（一九五八）の狩野川台風による浸水区域を青色に着色したものです。網島が島になっています。

『貝が語る縄文海進』（松島義章、有隣新書二〇一〇年増補版）の表紙の図は、六千年前の海岸線を復元したのですが、氾濫による浸水区域と海だった地域とがほぼ一致していることが分かります。

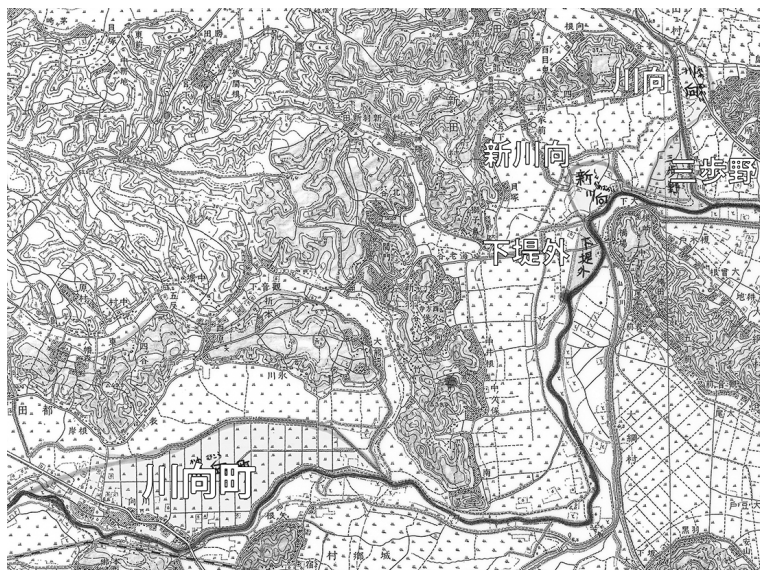
・川向地名の図

大倉精神文化研究所作成

この地図（図6）は、明治十四年（一八八二）測量の迅速測図を加工したものです。

鶴見川の両側には、「川向」地名が三カ所あります。

かつては村の一部だった所が、氾濫後の流路変更により、



【図6】



川の向こう側に取り残された場所です。

「下堤外」は、昭和二十年代の鶴見川の河川改修によって、新羽から大倉山（当時は太尾町）へ移されることになる場所です。

「三步野」（綱島上町）は新吉田と陸続きですが、早濶川対岸の綱島に属しています。これは、かつて早濶川が三步野の西側を流れていたことによるものと思われます。

#### 港北区内の駅名の移り変わり

東急の鉄道事業は、高級住宅地「田園都市」を核とする都市開発の一環として展開されたため、地域の発展にもなつて、新しい駅が設置されたり、駅名が変更されたりしています。港北区内の沿線地域も、鉄道開業によつて宅地開発が進み、名前が改称された駅がありました。

#### ・目黒蒲田東京横浜電鉄案内鳥瞰図（部分）

（大正十五年「一九二六」新春《平成二十年「二〇〇

八）十月復刻》

大倉精神文化研究所所蔵

大正十五年二月に丸子多摩川駅（現多摩川駅）―神奈川駅（現廃駅）が開業します。この鳥瞰図は開業直前に作成された沿線案内で、「大正の広重」と呼ばれた吉田初三郎が、開業後の沿線の様子をイメージして描いています。

元住吉駅、日吉駅、綱島温泉駅、太尾駅、菊名駅までの各駅に「田園都市」と記されているように、鉄道事業と田園都市計画が並行して進められていたことがわかります。このうち太尾駅は、のちに大倉邦彦が大倉山の土地を買い取り、大倉精神文化研究所の建設を始めたことで、太尾駅周辺の田園都市計画は変更されました。

#### ・（東京横浜電鉄・目黒蒲田電鉄）沿線案内

（昭和五年「一九三〇」十月）

沿革史資料No.6672-1

東横目蒲遊覧協会印刷部が刊行した沿線案内です。大

倉精神文化研究所の建物はまだ建設中でしたが、研究所の名前が太尾駅のそばに記されています。

この沿線案内では、研究所のところに手書きで赤枠が囲まれています。施主の大倉邦彦は、東京横浜電鉄専務支配人である五島慶太を通じて大量に入手しており、研究所の場所などを説明するために利用したと考えられます。

なお、現港北区内にある駅のうち、日吉、大倉山、妙蓮寺は、駅名が現在と異なっています。

### 沿線図からみる港北区の今昔

東急の沿線案内には、路線だけではなく、沿線周辺の名所や観光スポットの案内、散策コースの紹介なども載っていました。ここから今は失われてしまった港北区の様子をうかがうことができます。

・東横・目蒲・玉川電車沿線案内

(昭和十二年〔一九三七〕三月)

沿革史資料 No.1264-21

路線図とイラスト化された名所旧跡が記されています。港北区内は、

(小机駅)「小机城趾」

(菊名駅)「菊名池」

(大倉山駅)「大倉精神文化研究所」「大倉山天然スケー

トリック」

(綱島温泉駅)「綱島温泉」「綱島菖蒲園」「興禅寺」

(日吉駅)「慶應義塾」

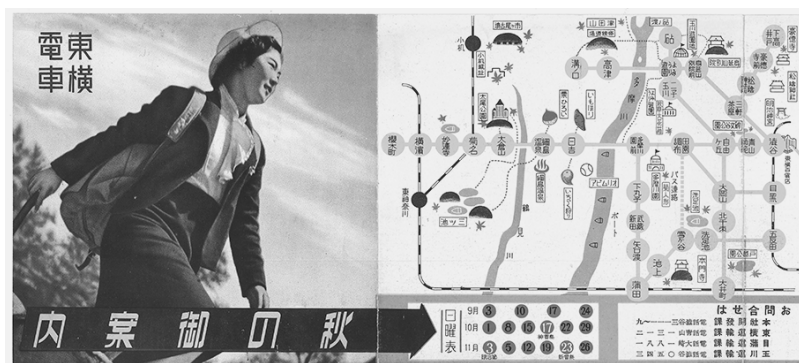
が紹介されています。また、「鶴見川の桜」「太尾公園の梅」「綱島の桃」も取り上げられています。

この裏面には、当時の観光スポットの情報がさらに詳しく記載されています。「沿線名所案内」では、各駅の名所が簡単な説明文で、また「沿線四季の行楽」では、季節ごとの観光スポットが紹介されています。

・東横電鉄 秋の御案内

(昭和十四年〔一九三九〕発行)

沿革史資料 No.1236-5



【図7（部分）】

【図7】は、秋の行楽シーズンにあわせて、沿線周辺のハイキングコースや紅葉狩りの名所などを紹介するリーフレットです。今や住宅地が広がる港北区ですが、当時は秋の味覚狩りが楽しめる田園地帯でした。網島駅からは「栗拾い」に、日吉駅からは「いちじく狩り」「芋掘り」に行くことができました。

#### 様々な目的別の地図類

##### ・よい子の交通双六

（昭和二十年代作成《平成二十一年（二〇〇九）一月復刻》）  
大倉精神文化研究所蔵

ひよし駅には慶應義塾大学、つなしま駅には温泉マーク、きくな駅にはボートが浮かぶ池（菊名池）が描かれています。網島と菊名の間には、三階建てのビルが描かれ「静かに」と書かれています。階段があり入り口が特徴的なビルの絵は大倉精神文化研究所、「静かに」は大倉山駅を表しているものと思われます。



・新羽八景

(平成十年〔一九九八〕四月)

大倉精神文化研究所蔵

新羽八景は、伊藤宏見氏が選定し、短歌を詠み、港北  
みりよく発見団が編集発行しました。

平成五年（一九九三）に市営地下鉄ブルーラインが開

通し、新羽地区は急速な変貌を開始しますが、西側の丘陵部には豊かな緑が残っています。伝説に包まれた古寺社も多く、町の中央を南北に走るバス通り沿いには蔵が建ち並んでいます。今でも散策をすると、八景と呼ぶにふさわしい景色に巡り会えることでしょう。廻り地蔵や注連引百万遍などの民俗行事も継承されています。

・歩こう！ 綱島

(平成十四年〔二〇〇二〕三月発行)

大倉精神文化研究所蔵

桃の里広場で毎年三月に開催される、綱島桃まつりで販売されたイラストマップです。

綱島は、大正時代から桃栽培と温泉で栄えた町です。

天然水の生産も盛んでした。近代的な商店街のそここに、そうした歴史の名残が見つかります。鶴見川、河川敷、商店街、古民家、寺社、綱島公園に綱島市民の森、街を歩くと見所がたくさんあります。

・子育てママたちが作ったマップ

大倉精神文化研究所蔵

地図は道具ですから、使う目的があり、その目的によつて様々な地図が作られ使われています。現在も人口が増え続けている港北区には、子育てをしているママ達が大勢暮らしています。そうしたママ達が必要としている情報に特化した地図を、ママ達が自ら作っています。紙の地図も作られています。今やWebデータとして検索するのが主な使い方となっています。区内各所を網羅したお出かけマップは、現在、一四種類あります。

・「紙版ココマップ」

(平成二十八年〔二〇一六〕九月発行)

・「ママとパパが作った大曽根周辺子連れおでかけマップ」  
（平成二十三年〔二〇一一〕四月発行）

・「新横浜子連れおでかけMAP 第二版」  
（平成二十四年〔二〇一二〕十一月発行）

・「綱島西子連れおでかけマップ vol.1」  
（平成二十四年〔二〇一二〕十二月発行）

・「ママ達が作った綱島東周辺子連れおでかけマップ vol.1」  
（平成二十五年〔二〇一三〕二月発行）

・「ママ達がつった樽町周辺子連れおでかけマップ vol.2」  
（平成二十五年〔二〇一三〕九月発行）

・「高田地区おでかけMAP」  
（平成二十六年〔二〇一四〕五月発行）

・「城郷地区子連れおでかけマップ」  
（平成二十六年〔二〇一四〕七月発行）

・「ママ達がつった師岡周辺子連れおでかけMAP」  
（平成二十六年〔二〇一四〕七月発行）

（平成二十六年〔二〇一四〕発行）  
・「大倉山子連れおでかけMAP」  
（平成二十七年〔二〇一五〕五月発行）

・「日吉キッズステーション vol.8」  
（平成二十七年〔二〇一五〕十二月発行）

・「菊名子連れおでかけMAP」  
（平成二十八年〔二〇一六〕三月発行）

・「新吉田周辺 新吉田地区・新吉田あすなろ地区子連れおでかけマップ」  
（平成二十九年〔二〇一七〕三月発行）

・「ママ達がつった新羽地区子連れおでかけMAP 第二版」  
（平成二十九年〔二〇一七〕四月発行）

・「しのはらママたちが作った!!子づれおでかけマップ 第二版」  
（平成二十九年〔二〇一七〕六月発行）

現物展示

・東京横浜電鉄・目黒蒲田電鉄沿線案内

(昭和三年〔一九二八〕～五年〔一九三〇〕)

沿革史資料No.12296-24

沿線案内は路線図が描かれたカラフルな表面が目されますが、展示品のように、裏面には「旅客運賃表」と「沿線名所旧跡」などが印刷されていて、ここから当時の沿線地域の状況を知ることができます。

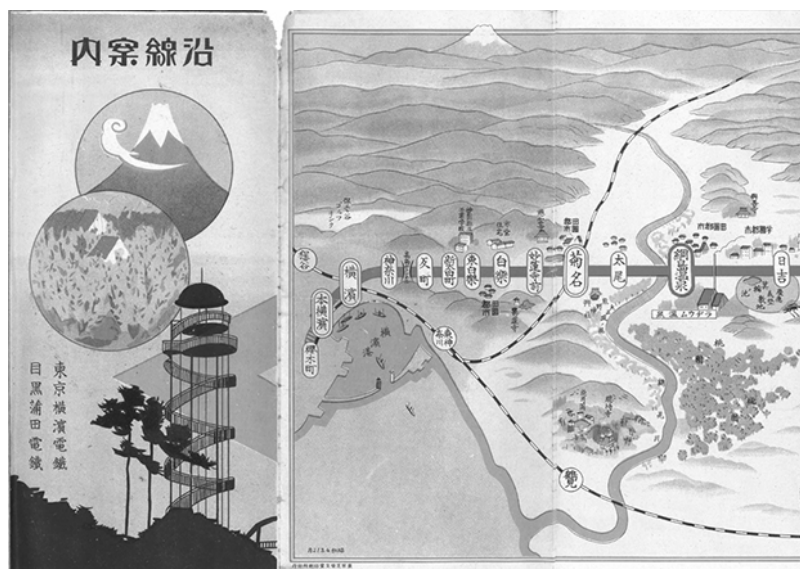
港北区内では、下田地蔵尊・日吉台田園都市（日吉）、桃園・ラヂューム温泉・鶴見川・神明山老松（綱島温泉）、熊野神社（太尾）、成田山行水行場（菊名）が紹介されています。

・東京横浜電鉄・目黒蒲田電鉄沿線案内

(昭和四年〔一九二九〕十二月発行)

沿革史資料No.12645-22

【図8】の表紙には、「多摩川園のらせん階段の塔」と、上の丸枠には「富士山」、下の丸枠には「桃に囲まれた



【図8（部分）】

綱島ラジウム大浴場」が描かれています。

現東横線が開業した時には、現港北区内の各駅（日吉、綱島温泉、太尾、菊名）に「田園都市」をつくる計画がありました。しかし、展示品では、日吉の「田園都市」は駅前の土地が慶應義塾に寄付されて予科、普通部、商工学校、寄宿舎などの移転が決まったことで、「学園都市」となっています。また太尾の「田園都市」は、大倉邦彦が土地を購入し研究所の建設に着手したことで、記載されなくなっています。

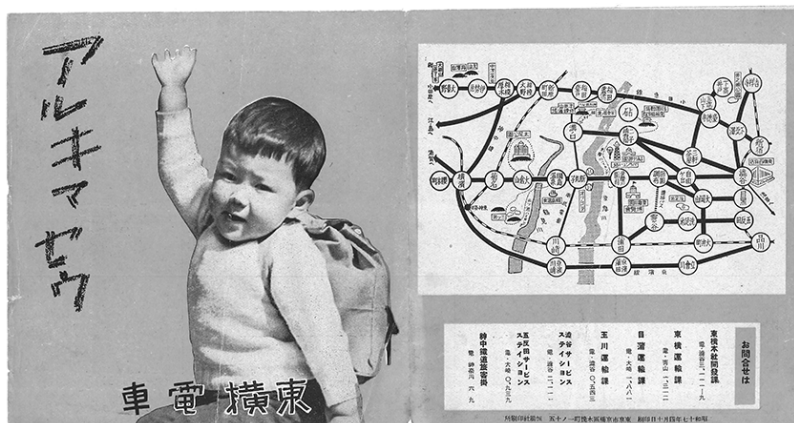
# ・アルキマセウ

（昭和十七年（一九四二）四月十日）

沿革史資料No.12296-22

【図9】は、東急各線と小田急線沿線の春のハイキングコースを案内する、東横電車が発行したリーフレットです。港北区内では、三ツ池コース（大倉山駅―太尾公園―熊野神社―三ツ池―綱島温泉駅）約八キロが紹介されています。

変貌する地域、港北の地図展（平井・星原）



【図9（部分）】

・東京横浜・目黒蒲田電車沿線案内

(昭和四年〔一九二九〕～五年〔一九三〇〕)

沿革史資料No.12296-23

日本名所図絵社が発行した横浜電鉄・目黒蒲田電鉄目蒲線・大井町線(当時)沿線の鳥瞰図です。吉田初三郎の弟子である中田富仙によって描かれたものです。

・鎮礎式記念絵葉書

(昭和五年〔一九三〇〕)

沿革史資料No.1323-5

昭和五年四月九日の鎮礎式で参列者に配布した記念葉書の一枚です。タイトルは「大倉精神文化研究所の地位」で、神奈川県東部の主要路線図が描かれています。この展示品には、鶴見から綱島温泉、登戸を経由する大東京鉄道の路線が建設予定となっています。この鉄道は山手線外周の環状路線として計画されたのですが、実現しませんでした。

・大倉精神文化研究所宛東京横浜鉄道株式会社運輸課葉書

(昭和八年〔一九三三〕元旦)

沿革史資料No.55171

当研究所の最寄り駅の駅名ははじめ「太尾」でしたが、この展示品のように、昭和七年(一九三二)三月三十一日に現在の「大倉山」に改称されました。隣駅の駅名はまだ「綱島温泉」のままとなっています。

附属図書館所蔵の関連図書

・横浜歴史年表編纂委員会編『横浜歴史年表』

横浜市、昭和二十六年〔一九五二〕

・横浜市立大綱小学校創立80周年記念事業実行委員会

『わたしたちの大綱』

横浜市立大綱小学校、昭和五十五年〔一九八〇〕

・横浜市港北図書館、港北古文書を読む会編『望月家文

書 第一輯』

横浜市港北図書館、昭和五十八年〔一九八三〕

・横浜市港北図書館、港北古文書を読む会編『望月家文書 第二輯』

平成十一年（一九九九）

横浜市港北図書館、昭和六十年（一九八五）

・港北区郷土史編さん刊行委員会編『港北区史』

港北区郷土史編さん刊行委員会  
昭和六十一年（一九八六）

・岩壁義光編『横浜絵地図』

有隣堂、平成元年（一九八九）

・神奈川県歴史教育者協議会編『神奈川県戦争遺跡』

大月書店、平成八年（一九九六）

・横浜市民局総務部住居表示課編『横浜の町名』

横浜市民局、平成八年（一九九六）

・横浜市歴史博物館・横浜市ふるさと歴史財団編『江戸時代の横浜の姿』

横浜市歴史博物館、平成九年（一九九七）

・神奈川東海道ルネッサンス推進協議会企画・編集『神奈川の東海道』

神奈川東海道ルネッサンス推進協議会

・岩田忠利『わが町の昔と今』

「とうよこ沿線」編集室、平成十二年（二〇〇〇）

・横浜市歴史博物館編『横浜の古墳と副葬品』

横浜市歴史博物館、平成十三年（二〇〇一）

・勝田五郎『小机巡り』

勝田五郎、平成十三年（二〇〇一）

・勝田五郎『旧鎌倉街道下道を歩く』

勝田五郎、平成十四年（二〇〇二）

・大倉精神文化研究所編『港北の歴史散策』

大倉精神文化研究所、平成十五年（二〇〇三）

・新羽史編集委員会編『新羽史』

ニイサンマルクラブ、平成十六年（二〇〇四）

・連合艦隊日吉台下壕の保存をすすめる会編『フィードワーク日吉・帝国海軍大地下壕』

平和文化、平成十八年（二〇〇六）

・大倉精神文化研究所編『横浜 港北の自然と文化』

大倉精神文化研究所、平成十八年（二〇〇六）

・黒塚武夫『港北・都筑散策ひとり旅』

平成二十七年〔二〇一五〕

草隆社、平成二十年〔二〇〇八〕

・西方寺『西方寺本堂修復落慶記念誌』

横浜都市発展記念館編『ようこそ！横浜地図ワールドへ』

西方寺、平成二十年〔二〇〇八〕

・大倉精神文化研究所編『横浜港北の地名と文化』

港北区氏子総代会編『港北区神社誌』

大倉精神文化研究所、平成二十一年〔二〇〇九〕

港北区氏子総代会、平成二十九年〔二〇一七〕

・日吉台地下壕保存の会編『戦争遺跡を歩く日吉』

小寺篤『横浜の流域地名研究』

日吉台地下壕保存の会、平成二十二年〔二〇一〇〕

小寺篤、発行年不明

・大倉精神文化研究所、横浜市歴史博物館編『大倉精神文化研究所内遺跡出土資料報告書』

大倉精神文化研究所、平成二十四年〔二〇一二〕

・横浜市歴史博物館編『海にこぎ出せ！弥生人』

横浜市ふるさと歴史財団、平成二十四年〔二〇一二〕

・都筑・橘樹研究会編『都筑・橘樹地域史研究』

都筑・橘樹研究会、平成二十四年〔二〇一二〕

・横浜市港北区役所総務部政推進課編『港北区のまちと新横浜駅開業50周年』

横浜市港北区役所総務部政推進課